

黒埼町の今昔

新聞からたどる黒埼の歴史 (六十八)

昭和四十六年、信濃川漁協大野支部は鮭の畜養と採卵の事業を開始した。

(先月号からの続き)
昭和四十五年ころから密漁の取締りが厳しくなる

戦後から続いた鮭の豊漁も、昭和二十五年、三十年と鮭を増やす稚魚放流もせず乱獲を続けたため、次第に鮭の遡上が減少し、四十年代に入ると河川資源保護法がつくられ、鮭の孵化施設のない漁業組合は全面的に漁獲禁止をさせられることになった。

取締りもはじめの内は割合ゆるやかだったので、大野の漁業組合員(流しかき)は昭和四十二、三年ころ大川まで流しに行っていたが、四十五年ころになると新潟から監視船が時々やってきて、組合員はその都度逃げたり隠れたりしなければならなくなった。今のままだでは絶対に鮭はとらせられない。なんとかしてこれを打開しなければと、組合員の間で次第に鮭の畜養孵化事業に取り組もうという声がおこってきた。

鮭の畜養事業がはじまる
昭和四十五年、当時の信濃川漁業組合大野支部長が(通

称ちやば善さんこと)佐藤善策さんの時。幹事の大阪久六さんと二人で、上流の魚沼郡漁業協同組合を訪れ、鮭の畜養や孵化のことについて教えてもらい、大野支部としてこの事業に取り組むことを約束して帰った。そして、今度は

関屋の信濃川漁業協同組合長齊藤金三郎さんを訪ね、この件につき魚沼漁協の了解を得たことを話し、鮭の畜養、孵化について指導を願うとともに、畜養採卵事業の申請をお願いした。畜養場の予定地としては、善久地内にある西蒲原郡土地改良区の用水堀の借用が決まり、昭和四十六年十一月一日、待望の許可がおりた。そして、同年十一月、信濃川漁協大野支部の鮭の畜養採卵事業が、県内水面担当技師の指導のもとにはじまった。

大野支部として最終的には、鮭の畜養と孵化を目標としていたが、最初から両方一緒に行うことは不可能のため、はじめは畜養と採卵のみを行った。採卵した卵はとりあえず兼ねてお願いしてあった魚沼

郡の浦佐漁協と、三条市の五十嵐川漁協の孵化場へ運び、孵化から放流できる稚魚になるまでの過程をお願いすることになった。こうして、信濃川河口に近い平場の大野において画期的な鮭の畜養採卵の事業がはじまった。

当時、この作業にあたったのは、組合長大阪久六さん、畜養管理を担当した佐藤善策さん。鮭、鱒係坂井誠二さん、佐藤寅一さん、栗林重則さん、伊藤正平さん、永井俊郎さん、永井守さん、これらの人たちが中心となってこの事業に取り組んだ。

大野近辺の信濃川で流し網でとった鮭を川水を引いて作られた畜養場のいけすに入れた。いけすは小さくいくつかに仕切られて、それぞれ鮭を

入れた日にちがわかるように記録してあった。係員はその記録を見て産卵の近いと思われる雌鮭を捕らえ、おなかからさわって卵の成熟している状態を確認すると、卵を容器の中に取り出し、その卵の上に雄鮭の白子を振りかけて受精させる。受精を終えた卵は一、二時間休ませてから組合員の手により自動車で魚沼の浦佐漁協や、三条の五十嵐川漁協へ孵化のため運ばれた。尚、運搬の途中に卵がすれて傷が付いたり、病菌が付かないようにと、よく水を切り圧縮して運んだ。このように鮭を捕らせられる代わりに畜養採卵の事業が昭和五十年まで、黒埼町善久の畜養場で行われたのである。

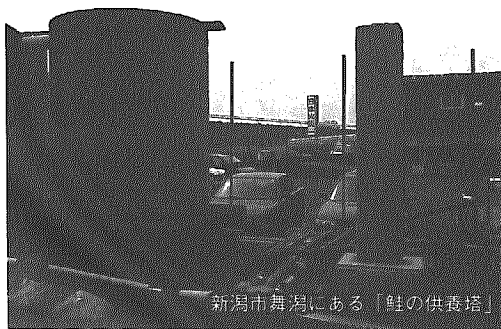
採卵受精した卵をプラスチックのヘギの中に約二、〇〇粒位入れて、水槽のきれいな水の中に沈め、常時水を流しかけておく約一か月位で発芽卵(卵に目が見える状態)となり、それからまたしばらくすると卵から稚魚が袋を破って頭を出す。孵化後は人工飼育が行われ、十一月の卵の授精から約四か月後の、翌年三月ころ約四、五センチに成長した鮭の稚魚がそれぞれの川に放流された。

こうして昭和四十七年から五十年まで、三条の五十嵐川漁協や、魚沼の浦佐漁協への鮭の卵の運搬は続けられたが、これはなかなか大変な作業であった。ところが、今度は「鮭の畜養から孵化放流まですべて地元に行うようにせよ」という強い県の指導によって、昭和五十年新潟市舞潟に大野支部(後の黒埼支部)の所属する信濃川漁業協同組合の畜養兼孵化場が建設された。そして、昭和五十一年以降は大野付近の信濃川で稚魚放流が行われるようになり、五十六年度には大野交通公園(当時五区から栄町裏にかけ現在の中ノ口川新堤防の所にあった)付近の中ノ口川に、地元で生まれ育った鮭の稚魚約三十万匹が、大野小学校の子供たちによって放流された。

取材協力(佐藤善策さん、大阪久六さん、佐藤寅一さん、坂井誠二さん、永井俊郎さん、永井守さん外)

平成八年六月末のある日、黒埼漁業組合員の所属する、新潟市舞潟にある信濃川漁業協同組合へ取材に訪れた。一千坪はあるという同漁協の施設に入ると、まず目を引くのは入口左側に建てられた「鮭の供養塔」と書かれた大きな石碑である。その文字は若杉元喜元新潟市長の書で、この塔は昭和五十年舞潟に信濃川漁協の鮭畜養兼孵化場が建設された時、この施設で使命を終える幾千、幾万の鮭たちの霊を弔うために建てられたのだという。

(続く)



新潟市舞潟にある「鮭の供養塔」